慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	イギリス産業革命期における生活水準論争再訪(上)
Sub Title	The British standard of living during the industrial revolution, revisited (I)
Author	松村, 高夫
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1989
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.82, No.2 (1989. 7) ,p.353(165)- 372(184)
JaLC DOI	10.14991/001.19890701-0165
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19890701-0165

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」82巻2号（1989年7月）

研究ノート

イギリス産業革命期における生活水準論争再訪（上）

松　村　高　夫

目　　次

Ⅰ　はしがき――ハートウェル＝ホブズボーム論争以降の生活水準研究の動向
Ⅱ　全国的実質賃金指数の作成
1　フリンによる諸指数の総合
2　フリンに対する批判
3　リンダートとウィリアムスンによる指数の作成
4　リンダートとウィリアムスンに対する批判
（以上本稿）
Ⅲ　地方的実質賃金指数の作成（以下次稿）
Ⅳ　結　び
付　イギリス産業革命期の生活水準に関する文献目録（本稿）

Ⅰ　はしがき――ハートウェル＝ホブズボーム論争以降の生活水準研究の動向

産業革命期のイギリス労働者階級の生活水準をめぐってハートウェル＝ホブズボーム論争が，1960年代に歴史家を楽観論者と悲観論者に二分しながら激しく展開されて以降，すでに四半世紀が経過した。その論争の中では，生活水準測定の指標として，実質賃金，消費財消費（小麦，肉，茶，たばこ等），国民所得，死亡率，失業率が分析対象とされたが，ホブズボームは，生活水準上昇が実証可能であるとした「楽観論」を批判するべく，実質賃金と国民所得がともに水準上昇の測定指標としては根拠薄弱であると主張し，代って消費財消費（とくに肉消費）を重視した。注意すべきは，ホブズボームは，生活水準低下を統計的資料にもとづいて積極的に主張したのではなく，その上昇を実証できるとした「楽観論」をいわば相手の土俵にたって批判したという点である。その意味で，ホブズボームの論稿は，かれ自身の表現を借用すれば，「消極的主張」であった。そこでは，文献的資料にもとづく社会的要因の分析は，意識的に排除されていた。論争は未決着のまま1963年に一応終ったが，その後10年を経た時点で，ホブズボームはハートウェルとの論争を回顧して，両者のあいだには，「主として実質所得の一般的水準の推移を，ほとんど排他的に扱ってきたが，それは『生活水準』問題の一部分にすぎないという諒解があった」と書いている。そして，全体としてみれば，実質賃金の上昇・下落の問題に「論争は矮小化され，……相対的にトリヴィアルな問題に限定された」と指摘し，「なぜならば，労働者が19世紀のある時期に実質所得の僅かな上昇あるいは減少をみたかという問題は，それ自体重要な結果ではないからである」とまでいい切っている（Hobsbawm, E. J. [1975], pp. 179-180, pp. 187-88）。

私は1970年に，「イギリス産業革命期の生活水準―ハートウェル＝ホブズボーム論争を中心として―」（『三田学会雑誌』63巻12号）でその論争をトレースしたことがあるが，それ以降今日までの20年近くの間に，生活水準をめぐるかなり多数の論稿が，*Economic History Review* や *Journal of Economic History* 誌上に発表され

た。また，産業革命期の生活水準問題は，経済史，社会史，労働史の通史的著書のなかでも，少なからず論述されるようになっている（例えば，Checkland, S. G.〔1962〕; Perkin, H.〔1969〕; Hunt, E. H.〔1981〕; Rule, J.〔1986〕; Royle, E.〔1987〕)。対象とする時期に関しても，産業革命期（1750年—1850年）の研究がいぜんとして多数を占めるものの，それ以前（Woodward, D.〔1981〕）やそれ以降（Barnsby, G.〔1973〕; Hopkins, E.〔1975〕; Roberts, E.〔1977〕）を扱う研究も現われている。わが国でも，1970年以降に発表された諸論稿について，すでに南部宣行，原剛等の優れた研究史の整理があるが(1)，本稿は，1970年以降，とりわけ最近発表された研究の整理を目的としており，前稿（1970年）の続篇にあたるものである。

ハートウェル＝ホブズボーム論争以降今日までの研究史の特徴としてまず指摘しなければならない点は，生活水準研究が実質賃金に集中されてきたことである。そのさい，社会的要因は初めから分析対象とされずに排除されているだけでなく，消費財消費も国民所得も水準測定の指標とはみなされていない。実質賃金の推移を算出するための名目賃金と生計費（物価）両指数の算出に全精力が傾注されたのであり，そうした研究動向は，1926年「クラッパム革命」のさい「論証」された実質賃金上昇論の再版であり精緻化である，とその基本的性格を把えることが，まず必要であろう。生活水準を実質賃金に等置することは，ホブズボームのいう生活水準研究の「矮小化」の極端な進行である。

このような実質賃金指数の算出は，大別すると2つの方向に進んだ。第1は，既存の諸々の賃金指数と生計費指数を再操作して，全国的実質賃金の推移（方向と振幅）を描きだすもので，1974年のフリンの論文（Flinn, M. W.〔1974〕）を契機として興隆しはじめ，リンダートとウィリアムスン（Lindert, P. H. & Williamson, J. G.〔1983〕）がその代表的存在である。第2は，地方史レヴェルでの賃金，生計費資料を蒐集し，その地方の実質賃金指数を算出するものであり，バースを対象としたニールの研究（Neale, R. S.〔1966〕）に端を発するが，このような研究として，バーンズビーのブラックカントリー研究（Barnsby, G. J.〔1971〕），グーアヴィッシュのグラスゴウ研究（Gourvish, T. R.〔1972〕），ホプキンスのスタウアブリッジ研究（Hopkins, E.〔1975〕），エクレストンのミッドランド研究（Eccleston, B.〔1976〕），ボーサムの北スタッフォードシャー研究（Botham, F. M.〔1982〕; Botham, F. M. & Hunt, E. H.〔1987〕）を挙げることができる。これらのグループは，全国的単一の長期間にわたる実質賃金指数作成の意義を否定したT. S. アシュトンの主張，すなわち，「時と所を大きくへだてた2つのグループの人々の福祉を比較することは可能ではないというのが事実なのである。……我々はある地域の価格資料を他の地域の賃金資料に適用することはできない。我々は消費された商品の性質や種類のみならず人間の要求や欲望においても変化がおこったかもしれないような長期間にわたる一枚の表をまちがいなく作成することはできないのである。我々が必要としているのは単一の指数ではなく，それぞれが小売物価からえられたり，短期間に限定されたり，一つの地域に，ことによると一つの地域内の一つの社会的または職業的グループだけに関連しているような多くの指数なのである」（Ashton, T. S.〔1949〕, p. 33）とする主張の延長線上に位置する研究である。それ故，このグループと全国的単一指数を考察した第1のグループとの間には，同じ実質賃金を対象としながらも共通点はない。むしろ両グループのベクトルは正反対

注（1） 南部宣行「生活水準論争の進展—ホブズボーム＝ハートウェル論争以降の検討—」『早稲田政治経済学雑誌』268号，1981年。原剛『19世紀末英国における労働者階級の生活状態』，1988年，勁草書房。片山健「ヴィクトリア後期イングランドに於ける中間的諸階層に関する考察」（慶應大学経済学部1985年度卒業論文）

の方向とみるべきであろう。アシュトンは，A.L.ボウリーとG.H.ウッドの賃金指数に関しては，それが新しい研究により無価値になることはないとはいえ，多数散在する賃金帳簿により補足されるまでは不確実であるとして適用を放棄し，また，N.J.シルバーリングの生計費指数も，小売価格ではなく卸売価格であること，数品目は消費財でなく原料であること，関税を除去していること，支出体系が妥当でないこと，という諸理由からその指数も否定し，その結果，これらの指数から実質賃金上昇を結論づけたJ.A.クラッパムの主張を斥けていた（*ibid.*, pp. 28-29)。しかしながら，第1グループのフリンやウィリアムスンには，アシュトンにみられるかような慎重さはない。否，アシュトンの指摘を意識的に排除して，全国的長期的（1世紀以上に及ぶ）実質賃金指数を作成するのである。もちろんかれらも既存の諸指数の限界を指摘しはするが，それはリップ・サービスにすぎない。

第1グループが，後述するように，砂上の楼閣にもなりかねない基本的弱点を有しながらもある種の「成果」を発表しつづけている背景には，1960年代後半から70年代を通しての数量経済史の興隆という学界潮流があることは否定できない。また，食物，飲酒，住宅，教育，レジャー，生活環境等の生活様式＝質の次元に関わる諸問題は，社会史の研究対象として，生活水準論争とは切り離されて扱われてきたことも指摘しておく必要があろう。(2) この（数量）経済史と社会史の不幸な分離は，生活水準論争を極端なまでに矮小化し，ハートウェル＝ホブズボーム論争が，ともかく論争として成立しえたような状況からは遠く隔たってしまった。そもそも1960年代に論争が生じたときには，発展途上国の工業化がその国の国民の生活水準を上昇させるか否かというすぐれて現代的課題を，イギリス産業革命期の生活水準の分析によって迂回的に解明しようとする意図があった。しかしながらその後の論争は，かような問題関心からはますます隔れているようにみえる。

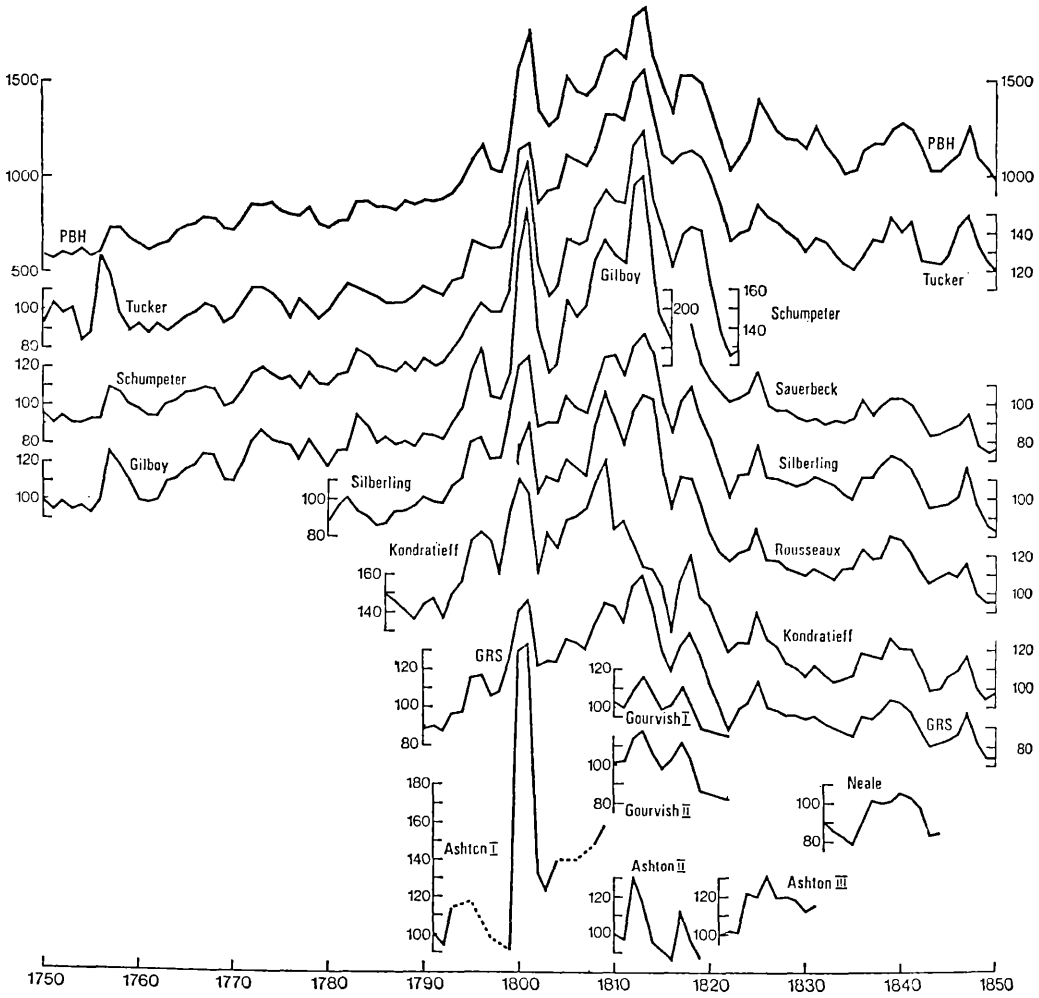
II　全国的実質賃金指数の作成

1　フリンによる諸指数の総合

フリンは，生活水準研究が実質賃金に集中される契機となった論文（Flinn, M. W.〔1974〕）において，生活水準測定の多様な指標のなかで実質賃金だけが「論争の最終的解決を提供する」(p. 395) と主張した。「ブリテンの労働者は，常に公衆衛生，住宅，教育，社会保険のような生活水準の要素よりも賃金水準により直接的な関心を示してきた」(p. 395) と述べ，他の要因を排除するのではないが，「分析的目的のために」実質賃金のみを対象とするのである。フリンの主張は，アシュトン以来の実質賃金測定に対する懐疑的傾向を克服せんとするものであった。それ故，フリンは実質賃金算出のための既存の生計費指数と名目賃金指数を可能なかぎり多数蒐集・比較し，そこから一般的傾向を帰結しようとしており，自らの指数を作成しているのではない。対象時期の起点は，産業革命の影響が現われる直前という意味で1750年を，また，終点は従来の生活水準論争に解答するという意味で1850年を選ぶが，その100年間を1813年頃を境に二分し，さらに1790年代初期と1820年代初期でそれぞれを細分する。この1750年—1850年を4つの期間に区分する点はフリン独特のもので，のちにその思惟性が批判されることにもなる。比較時点は，1年毎の変動によるリスクを小さくするために5年間平均が採用されており，（生計費指数では）1750/54年，1788/92年，1809/15年，1820/26年，1846/50年であるが，1809/15年のように7年間平均が採られている時点もある。フリンによれば，1812年，13年が異常に高い水準を示すため除かれたと説明されるが，この点ものちに批判されることになる。

注（2）　このようなイギリスの学界潮流については，松村高夫「イギリスにおける社会史研究とマルクス主義史学」『歴史学研究』532号，1984年9月号を参照されたい。

第1図　フリンの総合した諸物価指数　1750年—1850年



出典）Flinn, M. W.〔1974〕, p. 400より転載。

さて，生計費指数について，1)フリンは「理想的基準」'ideal index' として，卸売価格ではなく小売価格にもとづいていること，2)商品が労働者階級の片寄った部分で購入されたのではないこと，3)労働者階級の消費構造によって正当なウェイトをかけること，4)家賃を含むこと，5)(タッカーやフェルプス・ブラウン＝ホプキンスのように）長期間をカヴァーしすぎるのではなく，また，(アシュトン，グーアヴィッシュのように）短期間をカヴァーしすぎるのでもないこと，6)地域的格差，都市と農村間の差異を区別すること，の6点を挙げる。だが，この基準のうち，5)を除いては大略アシュトンにより指摘されていることであり，アシュトンはそれらの理由により全国的単一指数の作成を放棄したことを想起すべきであろう。フリンは既存の諸指数はこれらの基準の全てか大部分を満たしていないと指摘したのち，アシュトンのように放棄するのではなく「積極的態度」'positive attitude' を採るとして，多数の指数を重ねあわせる。まず，当該100年間をカヴァーするフェルプス・ブラウンとホプキンス（Phelps Brown, E. H. & Hopkins, S. V.（P. B. H. と略す）〔1956〕）とタッカー（Tucker, R. S.〔1936〕）の諸指数に，100年間ではないが

第1表　フリンの算出した物価指数の推移

作成者	発表年	期間	基準年	価格の性質	品目数	家賃	ウェイト	長期物価推移指数 1750/54—1788/92 %	1788/92—1809/15 %	1809/15—1820/26 %	1820/26—1846/50 %
Sauerbeck	1886	1818—1845 1846—1885	1867—77	卸売原料	31 43—45	無	有	—	—	—	−22.4
Kondratieff	1928	1786—1924	1901—10	卸売	25	無	無	—	+29.8	−27.8	−19.6
Silberling	1923	1779—1850	1790	卸売	35	無	有	—	+74.1	−31.2	−16.7
Tucker	1930	1729—1935	1900	契約	19—50	無	有	+11.1	+85.2	−24.5	−10.0
Gilboy	1936	1695—1815	1700	契約	31	無	有	+40.9	+65.6	—	—
Schumpeter	1938	1695/6—1822/3	1700/1	契約	31	無	無	+32.1	+69.4	−32.4	—
Rousseaux	1938	1800—1933	1865, 1885	卸売	42	無	無	—	—	−34.8	−16.4
G. R. S.	1953	1790—1850	1821—25	卸売	78	無	有	—	+65.7	−30.7	−19.4
P. B. H.	1956	1264—1954	1451—75	卸売，契約	17	無	有	+46.5	+84.6	−23.5	−10.5

出典）Flinn, M. W. 〔1974〕, p. 403, Table 1, および p. 404, Table 2. より。

かなり長期間をカヴァーするシュムペーター（Schumpeter, E. B. 〔1938〕），ギルボーイ（Gilboy, E. W. 〔1936〕），シルバーリング（Silberling, N. J. 〔1923〕），コンドラチェフ（Kondratieff, N. D. 〔1928〕），ゲイヤー＝ロストウ＝シュヴァルツ（Gayer, A. D., Rostow, W. W. and Schwarts, A. J.—（G. R. S. と略す）〔1953〕），19世紀のみのザウエルベック（Sauerbeck, A. 〔1886〕）とルソー（Rousseaux, P. 〔1938〕）の諸指数を並置し，さらに短期的なアシュトンの3つの指数（Ashton, T. S. 〔1949〕），バースを扱ったニールの指数（Neale, R. S. 〔1966〕），グラスゴウを扱ったグーアヴィッシュの2つの指数（Gourvish, T. R. 〔1972〕）をも重ねあわせる。その結果，第1図にみられるような，驚くべきほどの波形の一致——変化の方向と程度の双方の点で——が，とくに1790年—1850年の期間でみられることを発見する。じじつ，生計費指数は1750/54年—1788/92年では，11.1%—46.5%の範囲で上昇がみられ，つづく1809/15年までの時期の上昇は，（コンドラチェフの指数を除けば）65.6%—85.2%の範囲ととくに顕著である。さらに，1809/15年—1820/26年の時期は，23.5%—34.8%の範囲で下落を示し，つづく1846/50年までの時期は，10.0%—22.4%の範囲でやや下落している。このなかで，1750/54年—1788/92年の最初の時期は，4つの指数が上昇を示すがその程度については共通性がみられず，実質賃金算出の利用に耐えないとして棄却している（第1表）。

ここで注意すべきは，アシュトン，ニール，グーアヴィッシュの地方的小売物価も重ね合わせている点である。前述したように，アシュトンは長期間にわたる全国的生計費指数を求めることの意義を否定し，代ってオールダムとマンチェスターの3枚の短期間の指数表（1791年—1809年，1810年—19年，1821年—31年）を提示したのだし（Ashton, T. S. 〔1949〕），グーアヴィッシュも，グラスゴウの小売物価（1810年—19年，1822年，1831年）がロンドンの卸売物価（シルバーリング，ルソー，G. R. S. の指数）より下落の程度が小さいことを明らかにしていた（Gourvish, T. R. 〔1970〕）。すなわち，工業化の影響をほとんど受けていない商業中心地ロンドンの物価指数が，従来全国的物価指数とみなされてきたことを批判し，他の地域には必

第2表　フリンの名目賃金指数の推移

作成者	対象とした労働者	名目賃金の推移			
		1750/54—1788/92 %	1788/92—1810/14 %	1810/14—1820/24 %	1820/24—1846/50 %
(全般的指数)					
Wood	都市労働者		+69.4	− 9.4	− 9.0
Kuczynski	全労働者		+33.0	−17.3	− 0.1
Tucker	ロンドン・アルティザン	+ 1.5	+54.8	− 5.5	− 5.4
P. B. H.	クラフツマン	+20.8	+65.5	0.0	+ 2.1
〃	レイバラー	+18.7	+68.4	0.0	+ 3.1
(個別地域あるいは職業)					
Gilboy	グリニッチ・レイバラー	+20.0			
〃	グリニッチ・クラフツマン	+13.3			
〃	ランカシャー・レイバラー	+66.6			
Bowley	マンチェスター・綿業労働者			− 3.5	−12.7
〃	農業労働者（E.&W.）		+92.5	−21.9	− 9.2
〃	スコットランド・炭鉱夫			−19.2	
〃	スコットランド・農業労働者	+77.0		−27.5	+49.2
Bowley & Wood	植字工（E.&W.）		+41.9	−11.4	+ 6.4
Bowley	カムバーランド・農業労働者		+85.6	−34.1	
〃	農業労働者（E.&W.）				+ 4.6
〃	ロンドン・建築工		+70.0	− 5.1	+ 5.4
〃	エディンバラ・建築工		+98.2	+17.2	+ 3.2
Wood	綿業工場オペラティヴ				− 7.7
〃	手織工				−24.2
Neale	バース・レイバラー		+14.9		

出典）Flinn M. W. [1974], p. 407, Table 3. より。

ずしも妥当しないことを，グラスゴウの豊富な資料で主張していたのである。したがって，フリンが物価指数の波形の類似性を主張するさいに，アシュトンやグーアヴィッシュの指数を含めることは，かれらの本来の意図からは乖離する。

つぎに，名目賃金については，フリンは，ボウリーとウッド（Bowley, A. L. & Wood, G. H. [1898—1910]），ギルボーイ（Gilboy, E. W. [1934]），タッカー（Tucker, R. S. [1936]），クチンスキー（Kuczynski, J. [1942]），P. B. H.（[1955]），ニール（Neale, R. S. [1966]）の指数を，当該100年間を4つの期間にわけて並置・比較するが，その上昇・下落傾向は生計費指数で示されたような共通性を示さない。1750/54年—1788/92年の時期の賃金データは7点と少なく，上昇率にも共通性がなく，「この期間に実質賃金が一般に上昇したとするのは，勇敢ではあるが無謀な（brave）歴史家であろう」（p. 408）と述べて，一般化を断念する。つづく1788/92年—1810/14年（生計費指数では，1788/92年—1809/15年と時期区分に若干のズレがある）の期間では，大幅な名目賃金上昇の傾向がみられるが，バースのレイバラーを扱ったニールの地方史データの14.9%上昇を例外として，他の賃金上昇率は30%以上を示している。すなわち，クチンスキーは33.0%と比較的小さい値であるが，ウッド（都市労働者）では69.4%，タッカー（ロンドンのアルティザン）では54.8%，P. B. H. では（クラフツマン）65.5%，（レイバラー）68.4%を示しており，ボウリーでは（5職種）41.9%から98.2%の間の値を示している（第2表）。ここからフリンは，ナポ

レオン戦争中の実質賃金は横ばいだったという重要な結論を導きだす。戦争中は前述のごとく物価も大幅に上昇したが，名目賃金も同じように大幅に上昇したことから，「1810/14年以前には実質賃金が上方または下方に著しく変化したことを示す指標はほとんどない」と結論し，「僅かに取得した多くのグループが，僅かに損失したグループと同じ位あっただろう」(P. 408) とするのである。かくしてナポレオン戦争中における労働者階級の貧困化の進行は否定される。これがフリンの第1の帰結である。

第2の帰結は，ナポレオン戦争後10余年間に実質賃金は上昇したとする点である。すなわち，1810/14年—1820/24年は，3つの指数を除いていずれも名目賃金の下落傾向を示すが，下落の程度は，ボウリー（カムバーランドの農業労働者）の34.1%減が最大値で，他はそれ以下（0%～28%）であり，余り大きくない。一方，前述のごとくこの時期の生計費指数は，23%—35%と大幅な下落を示しているので，持続的デフレのなかで実質賃金は上昇し，多数の者が生活水準の上昇を享受したにちがいないとするのである。それにつづく1820/24年—1846/50年の時期では，ある指数は上昇を，ある指数は下落を示すため，賃金指数に一定の傾向は見いだせない。ただし，ボウリー（スコットランド農業労働者）の49.2%増，ウッド（手織工）の24.2%減を除けば，他の指数は6.4%増と12.7%減の間にあるという共通性を示す。したがって名目賃金は概してこの期間には横ばいないし変動は少なかったとみてよい。少なくともそれ以前の時期に比べて上昇傾向を示していることは間違いないが，物価の上昇もほぼ同程度であったので，実質賃金の上昇は僅かであったという。

かくして実質賃金について，第1の時期1750/54年—1788/92年は，資料が少なく確実なことはいえない。第2の時期—ナポレオン戦争中は，実質賃金の変動は少なく，第3の時期—戦後10余年間（1813年頃から1825年頃まで）は，年率2.5—3%で上昇した。第4の時期—19世紀第2四半期は，上昇は僅かであった。すなわち，1750年—1850年の100年間のなかで，ナポレオン戦争後の10余年が唯一実質賃金が急上昇を示した時期であったと結論した。この結論は，従来の通説とは異なる，意外性をもつものであった。

フリンは論稿の最後で，再び生活水準はキャッシュ・タームだけで測定されるべきでなく，「実質賃金推移を一般化する試みは，たんに社会経済的相互作用の複雑性のなかのひとつの—おそらく主要な—可変数を分析的目的のために分離した」(P. 411) のであって，文化的環境の多くの局面も考慮にいれなければならないとする付帯条件をつけているが，その後の研究は間もなく実質賃金だけが他の条件から切り離されて独走することになる。

2 フリンに対する批判

フリン論文に対して，まずグーアヴィッシュが批判を加えた（Gourvish, T. R. [1976]）。この批判は論点が拡散し，必ずしも系統的批判とはいえないが，批判点は3点にまとめられよう。第1点は，フリンが厳密に5年間平均をとっていない点についてである。もし厳密に1788/92年—1811/15年をとってナポレオン戦争期のインフレ率を算出し，1811/15年—1822/26年をとって戦後デフレ率を算出するならば，それぞれ72—84%（フリンでは，65—74%），37—39%（フリンでは，31—35%）を示す（P. 137）。したがってナポレオン戦争中，賃金は物価と同一歩調を保ったとするフリンの主張は，否定されはしないものの脆弱になるとした。

批判点の第2は，フリンは連合王国の小麦価格の変動から生計費指数の変動を算出しているが，この方法は地方によっては適合しないとした点である。西スコットランドでオートミールが主食であるばあいには，オート麦の価格（小麦の価格も）の変動幅は，上昇期も下落期もフリンの算出した数値よりも小さく，したがって戦争中に戦後デフレ期よりもより大きな実質賃金を得ていたことになるという。第3点として，

アシュトン，ニール，グーアヴィッシュの地方小売価格を，他の多くの卸売物価と混同することは，やはり許されないとした。

また，賃金についても，地方毎に職種別に考慮する必要性を唱え，もしそうするならば，フリンのいう推移とは異なる動向を示すものもあったとする。1813年—22年の期間に，物価下落を上回る賃金下落があったグラスゴウの例として，建築レイバラー，指物師，家具製造工をあげている。（賃金下落が物価の下落を上回っていないものには，レンガ積み工，石工，塗装工，鉛管工，木びきがある。）そして，「1813年—25年を賃金上昇の決定的時期とするには，なお数ヶ所の地域や多数の職種毎に，失業，労働時間の分析も含めてみなければ断定できない」（p. 142）と結論したのである。

これに対しフリンは，同じ誌上で応答した（Flinn M. W.〔1976〕）。グーアヴィッシュのより洗錬された方法でも結論には大差はなく，「理想的基準」が妥当しない指数であっても，「産業革命期の実質賃金の傾向という大問題に対し何らかの種類の解答に到達するためには」（p. 144），それらの指標を使うことが必要である。むしろ，グーアヴィッシュの方こそ，単年度の賃金率を長期的傾向と混同しており，また，個々の商品価格の変化をもってきても一般物価の推移を分析することにはならない（小麦でなくオートミールをもってきても，スコットランド人がよく食べたジャガイモを無視しているではないか）と反批判を加えたのである。ここには，全国的指数分析対地方的指数分析，ないし一般性対個別性という方法論上の対立が反映されている。

つづいて，フォン・タンツェルマンが，より精緻な統計的手法を使ってフリン論文を批判した（Von Tunzelmann, G. N.〔1979〕）。「新しい通説として定着しつつある」フリン説に対し，同じデータを用い，時期も同じ4期に区分し，「主成分分析」'principal component analysis' という統計的手法を用いて「楽観論」と「悲観論」の極端なケースの推移を設定し，じっさいの推移は両者の幅の間にあるとした。フリンの指数をその幅のなかの一つの可能性として把えたのである。フォン・タンツェルマンの結論は，論文末尾に以下の6点にまとめられている。1)一般物価指数のフリンの分析と同一の結果を得た。2)しかしながら，実質賃金の型は，1750年—1850年の間に，最大15%増，最小0%の可能性がある。3)ナポレオン戦争後10年間に急激な実質賃金上昇が生じたというフリンの強調には，1790年以降実質賃金の型について「楽観的」見解がかなり受け容れられるならば，部分的には正当性がある。しかし，この飛躍はたぶん物価の頂点と谷の性格により誇張されているだろう。もし労働者階級の総合的実質所得に関する情報（例えば，失業の変化等）が得られるならば，1820年—50年が実質賃金上昇の期間であったことが，より強調されて然るべきであろう。4)実質賃金の戦争中の下落傾向と戦後の急上昇は，工業化には関係なく，戦争によるものである。5)1813年直後のデフレは実質賃金を増加させたようにみえるが，1816年—18年の物価上昇により相殺された。フリンが主張するのは，1820年代初期のデフレによるものである。6)都市間地域間格差によりこの結論を修正する必要はない（p. 145）。

かくして，フォン・タンツェルマンは，フリンが総合した指数をより一般化することに貢献したのである。

3 リンダートとウィリアムスンによる指数の作成

リンダートとウィリアムスン（以下，L. W. と略す）の *Economic History Review* 誌上の論稿（Lindert, P. H. & Williamson, J. G.〔1983〕）は，コンピューターの使用により従来の多数の名目賃金と生計費指数から算出した実質賃金の推移にもとづいて，超楽観的主張をしたものである。かれらはまず，1755年—1851年の期間の18の職種をとりあげ，完全就業したとの仮定の下で，名目年間所得を算出する（p. 4, Table 2）。

第3表　実質完全就業所得（成人男子）（イングランドとウェールズ）

1851年＝100

基準年	農業労働者	中間グループ	アルティザン（労働貴族）	全ブルーカラー	ホワイトカラー	全労働者
1755年	65.46	47.54	56.29	56.50	23.93	42.74
1781	61.12	46.19	48.30	50.19	22.24	39.24
1797	74.50	52.54	46.73	53.61	23.45	42.48
1805	74.51	52.96	42.55	51.73	20.82	40.64
1810	67.21	51.54	42.73	50.04	19.97	39.41
1815	75.51	57.81	52.18	58.15	25.49	46.71
1819	73.52	54.35	50.26	55.68	27.76	46.13
1827	75.86	70.18	66.39	69.25	39.10	58.99
1835	91.67	85.97	78.62	83.43	66.52	78.69
1851	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00
	（1781年—1851年の変化率）					
悲観的最大値	31.6%	75.1%	68.0%	61.8%	294.5%	103.7%
"ベスト・ゲス"	63.6%	116.5%	107.0%	99.2%	349.6%	154.8%
楽観的最大値	107.0%	175.3%	164.2%	154.4%	520.3%	220.3%

出典）L. W.〔1983〕, p. 13, Table 5. より。
ブルー・カラー＝農業労働者＋中間グループ＋アルティザン（＝労働貴族）
ブルー・カラー＋ホワイト・カラー＝全労働者
悲観的最大値はタッカーの衣服指数の北部都市支出のウェイトと家賃を加えた生計費指数によるもの。
楽観的最大値は北部農村支出のウェイトで家賃を含まぬ生計費指数によるもの。
"ベスト・ゲス" は L. W. のもので南部都市支出のウェイトと家賃を加えた生計費指数によるもの。
なお，この指数には未だ失業，死亡，都市不快は算入されていない。

そして，その18の職種を，農業労働者，ミドル・グループ，労働貴族（3者の合計がブルーカラー），ホワイト・カラーの4つのグループに分類し，各グループ毎の名目年間所得を算出する。一方，生計費指数については，卸売物価指数は生計費指数をかなりの程度反映するとして，タッカー（Tucker, R. S.〔1936〕），シルバーリング（Silberling, N. J.〔1923〕），ルソー（Rousseaux, P.〔1938〕），G. R. S.〔1953〕の卸売物価指数にかれら自身の数値も加え，家賃その他の消費のウェイトを再考慮して，1781年から1850年までの生計費指数を算出する（p. 11, Table 4）。そして実質賃金をだすのだが（第3表），その「ベスト・ゲス」の結果は，「1810/14年以降は実質賃金水準で，重要な変化を示すものはほとんどない」（Flinn, M. W.〔1974〕, p. 408）という，前述したフリンの結論をほぼ裏付けることになった（p. 10）。しかし，L. W. の数値がフリンと異なる点は，フリンが実質賃金の改善が1813年以降10年余のデフレ期でのみみられるとするのに対し，L. W. は実質賃金が1810年—15年の間には一般的上昇をみるが，1815年—19年には下降し，その後は持続的上昇があり，1820年から1850年の間には約2倍になったとしている点である。「……平均的労働者は1830年以降のいかなる10年間も1820年以前のいかなる10年間よりも富裕になった」（pp. 10-11）とするのである。

L. W. は，さらに失業や都市化に伴う「不快さ」，人口過密，公害など社会環境の劣悪化を考慮に入れ，しかもそれらを数量化し，生活水準のマイナス要因として計算する。総じてかれらの結果は，つぎのようになる。1781年から1851年の間に，最下層の農業労働者でさえ，少なくとも60%の上昇，ブルー・カラー労働者をとると少なくとも86%の上昇，全労働者をとると少なくとも140%の上昇を示す（p. 24, Table 7）。それ故「産業革命の終点で労働者が直面した困難は，かれらの祖父たちの困難ほど大きくはあ

りえなかった」(p.24) と結論する。

L.W.の分析が，生活水準を上昇させるものとして，賃金引き上げだけでなく，より高賃金の職種への転職によるシフト・アップ，および，より高賃金の地域への移動によるシフト・アップを考察の範囲に含めているのは，従来の生活水準研究で希薄だった点を補うものとして評価できよう。かれらの推計によると，1871年—1851年の間にブルー・カラー労働者全体の平均実質賃金に対して，転職および地域移動によるシフト・アップがもたらした寄与率は，各々5.3%，3.6%である。すなわち，この期間の所得増のうち90%以上が賃金引き上げによるものであり，他の二要因のシフト・アップの寄与率は比較的小さいことが判明する (p.19)。

ウィリアムスンは，別稿で，熟練労働者と不熟練労働者の賃金格差の推移を，統計的に分析している (Williamson, J. G. 〔1982〕, 〔1985〕)。かれは，従来の19世紀の賃金データは「全雇用労働のなかの極めて限定された範囲であった」として，新たに「サーヴィス」業を加えた。ここでいう「サーヴィス」業とは，公務員，弁護士，事務員，医師，校長というホワイト・カラー層である。そして，ウィリアムスンは熟練工と不熟練工の賃金格差の分析のために一般均衡モデルを用い，初期工業化の時期の技術進歩はアンバランスであり，不熟練労働よりも熟練労働の需要をひきおこすとの仮定の下に，1815年以降世紀半ばまでは熟練労働に対する需要増大が熟練労働の非弾力性（非農業部門の熟練労働者の相対的稀少性）の故に，熟練労働者の賃金は上昇をつづけ，賃金格差も拡大した。その後1850年以降1911年までは技術進歩のアンバランスが減少し，熟練労働供給がより弾力的になるに伴い，賃金格差は縮小した。つまり，ブリテンの19世紀の賃金構造は劇的に変化し，初期工業化の時期に不平等（賃金格差を主要構成要素とする）は拡大し，産業発展の成熟局面で縮小するとしたクズネッツ曲線が描かれると主張した。すなわち，ウィリアムスンは，第4表にみられるように熟練労働者の不熟練労働者に対する所得比率は，「経済全域」では，1815年の2.50から，1851年の3.76にまで上昇し，その後1911年の2.48まで多少の起伏を伴いながら減少する。非農業部門

第4表　熟練労働者と不熟練労働者間の賃金格差

（成人男子）（イングランドとウェールズ）

	経済全域					非農業部門				
	(1) 全熟練労働者		(2) 製造業熟練労働者	(3) サーヴィス熟練労働者		(4) 全熟練労働者		(5) 製造業熟練労働者	(6) サーヴィス熟練労働者	
	L.W.	J.	L.W.	L.W.	J.	L.W.	J.	L.W.	L.W.	J.
1815年	2.50	2.26	1.54	4.67	4.20	2.08	1.87	1.27	3.87	3.49
1819	2.69	2.44	1.54	5.24	4.83	2.29	2.07	1.31	4.46	4.11
1827	2.93	2.65	1.65	5.79	5.32	2.16	1.95	1.22	4.27	3.92
1835	3.57	2.90	1.65	7.86	6.26	2.62	2.13	1.21	5.77	4.59
1851	3.76	2.73	1.66	8.44	5.59	2.73	1.98	1.20	6.13	4.06
1861	3.49	2.70	1.60	7.28	5.30	2.82	2.18	1.29	5.88	4.28
1871	3.44	2.80	1.64	6.67	5.14	2.88	2.34	1.38	5.59	4.31
1881	3.33	2.83	1.64	6.16	5.05	2.86	2.43	1.41	5.29	4.34
1891	2.95	2.56	1.50	4.97	4.17	2.49	2.16	1.26	4.20	3.52
1901	2.58	2.32	1.43	4.12	3.61	2.22	2.00	1.23	3.54	3.10
1911	2.48	2.25	1.54	3.58	3.12	2.16	1.96	1.34	3.12	2.72

出典）Jackson, R. V. 〔1987〕, p. 563, Table 1とp. 567, Table 5. より合成。
L. W.＝リンダートとウィリアムスンの数値
J.＝ジャクスンの修正数値

だけとると，その比率は，1815年の2.08から上昇し，ピークは若干遅れて1871年で2.88となり，以降1911年の2.16まで減少する。1815年以降にクズネッツ曲線が現われるのはナポレオン戦争によりその出現が遅延させられたからであるとするが，果してかような曲線の析出は妥当であろうか。L.W.の論証に鋭い批判の矢を放ったのはジャクスンであるが，その批判も含めて，つぎにL.W.の分析に関する問題点を検討しよう。

4　リンダートとウィリアムスンに対する批判

L.W.の実質賃金指数の作成は，全国的レヴェルでマクロ的に把えた積極的試みとして評価できる面があるものの，つぎのような問題点をもつものと私は考える。それを3点にまとめ，最後に斉藤，およびジャクスンによる批判を紹介しよう。

第1は，名目賃金データの信頼性についてである。L.W.の賃金データの特徴は，ホワイト・カラー労働者を加えたことにある。しかしながら，賃金データの中心はボウリーとウッドのそれである。そして，1755年—1851年の期間をとってこれらのデータにウェイトをかけているのだが，そのウェイトのかけ方は，リンダートの *Journal of Economic History* 誌上の論稿（Lindert, P. T.〔1980〕）による方法と結論によるとされている。しかしながら，17世紀後半から1811年までの，埋葬記録や住民台帳からの推計によりウェイトをかけることには大きなリスクが伴うし，L.W.のブルー・カラーとホワイト・カラーのウェイトのかけ方は明解には説明されないまま，1755年—1851年の名目年間所得指数が提示されるのである（第5表）。

この数値によると，1810年—51年にブルー・カラーの賃金は下落している（とくに1835年においては，一層大きく下落している）が，ホワイト・カラーで同じ期間に43.01→100.00と上昇が激しいので，全労働者では84.89→100.00と上昇をみたことになる。つぎに1819年—35年をみてみると，同様に，ブルー・カラーの賃金は101.84→94.11と下落しているが，ホワイト・カラーが50.77→75.03と上昇が激しいので，全労働者では84.37→88.77と上昇したことになる。すなわち，ブルー・カラーの賃金だけとれば，19世紀前半にはむしろ上昇は見いだせない。そもそも，ホワイト・カラーの賃金を算入することは，従来の産業革命期の生活水準論争から逸脱することになる，という問題が指摘されよう。従来生活水準論争はマニュアル労働者を対象として行われてきたのであって，L.W.のように，公務員，聖職者，弁護士，事務職，医者，教師，土木技師・測量士，メッセンジャー・ポーターというホワイト・カラーを算入して議論してはこなかった。フリンは，「かれらが示したことは，ブルー・カラー労働者の実質賃金に関してはなお懐疑的ではあるにせよ，ホワイト・カラー労働者が経験した大幅な取得はもはや疑問の余地がない。これを示したことは，リンダートとウィリアムスンの発見のなかで最も価値ある

第5表　名目完全就業所得

（イングランドとウェールズ）1851年＝100

	農業労働者	中間グループ	労働貴族	全ブルーカラー	全ホワイトカラー	全労働者
1805年	139.12	98.89	79.44	96.58	38.88	75.87
1810	144.76	110.95	92.03	107.81	43.01	84.89
1819	134.47	99.41	91.92	101.84	50.77	84.37
1835	103.41	96.98	88.68	94.11	75.03	88.77
1851	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00

出典）L. W.〔1983〕, p. 7 より抜粋。原表は1755年—1851年で10時点がとられている。全ブルーカラー＝農業労働者＋中間グループ＋労働貴族であり，全労働者＝全ブルーカラー＋全ホワイトカラーである。

新規なことであるといえよう」(Flinn, M. W. 〔1984〕, p. 92) と高く評価するが，バーンズビーの見解は，それとは異なる。かれはホワイト・カラーのウェイトのかけ方を明示しないL. W. の「言明は信頼性がほとんどなく，かれらの結果は極めて危険の大きいもの astronomically speculative である。1755年—1851年に弁護士の所得は700%近く増加し，教師では400%以上，土木技師・測量士では250%の増加となっているのに対し，ウッドとボウリーの数値から得られたマニュアル労働者の賃金上昇は，建築業の117%と印刷業の61%の間にあった。L. W. がいわゆる『ホワイト・カラー』労働者の実質賃金を含めることにより，そのより大きい上昇を示しえたのは驚くに値しない」(Barnsby, G. J. 〔1988〕, p. 83) と指摘している。

第2は，生計費指数に関してである。L. W. の1820年—50年に実質賃金が2倍になったとする超楽観的結論は，この期間の生計費指数の急低下に起因する。L. W. の使用した生計費指数は1788/92年—1820/26年の期間には，「楽観論者」(とリンダートたちは命名している) G. R. S., ルソー，シルバーリングと，「悲観論者」P. B. H., タッカーの中間に位置するのであるが，それ以降の1820/26年—1840/50年の期間になると，かれらの生計費指数は26.0%減となり，シルバーリング16.7%減，ルソー16.4%減，G. R. S. 19.4%減より著しく大きな低下を示している。これがL. W. の1820年以降の実質賃金急上昇をもたらすのである。では，何故26.0%減になるのか。この点は，のちにフリンが指摘するように，L. W. の生計費指数が他の指数の平均の約2倍の低落を示すのは，選択した商品の種類，ウェイトのかけ方の相違，家賃を算入したか否かによる。しかし，フリンによれば，「生計費指数の変化の性格について正確な情報が欠如しているなかでは」，極端な指数を使うのではなく，「全ての入手可能な合理的な安全な指数」を使うことが「賢明である」。旧来の5つの生計費指数を使用すれば，1812/13年以降1846/50年までの実質賃金（ブルー・カラー）は，フリンの算出した数値と極似してくるはずであり，少なくとも1835年まではそうである (Flinn, M. W. 〔1984〕, p. 91)。

第3は，失業率の生活水準への影響に関してである。1850年以前の全国的失業統計は，イングランドには存在しない。そこで，L. W. は1851年から第1次世界大戦までの機械，金属，造船の失業統計から，フィリップス曲線を援用して，1850年以前の失業率を推計し，「非農業部門の失業は1840年代あるいは50年代に極めて高いわけではなく，たとえ1820年以降上昇したとしても，かようなありそうもない出来事は労働者の実質所得に僅かな影響 trivial impact を与えたにすぎないと我々は結論する」(L. W. 〔1983〕, p. 16)。フィリップス曲線自体が19世紀についてのボウリーとウッドの乏しい賃金データにもとづいていることをひとまずおくとしても (Phillips, A. W. 〔1958〕), 1851年以降の上記3産業の失業率は極めて疑わしいものである。機械工については1851年の合同機械工組合 A. S. E. の失業給付者数にもとづいて算出されたものであるが，機械工組合よりはるかに整備された長期的失業統計が得られるフリント・ガラス製造工のばあいでも，それをもってその産業の失業率とすることは余りにリスクが大きい (Matsumura, T. 〔1983〕)。何故ならば，年間でもデータをとる時点によって全く異なり（＝季節的変動）地域的にも差異があり，さらに失業期間が不明であると一時点の失業率は余り意味をもたないからである。ましてや熟練労働者でない未組織のままの圧倒的多数の労働者については，失業状態の把握は不可能である。それ故，組織された熟練労働の失業率をかりに有効であるとしても，1850年以前を推計することは，全く意味をなさない数値の遊戯にすぎない。1850年以前の不況が失業を通して労働者に与えるインパクトは，階層別にまた地域別に著しく異なっていたのであるから，「イングランドにおける1820年代の失業率」なるものは，ほとんど意

味をなさないのである。さらに失業や都市化に伴う社会環境の劣悪化の計量化も，L.W.は納得的に行なったとはいいがたい。

最後に，斎藤とジャクスンによる批判について述べよう。「労働者階級のなかに2つのグループがあったことは認められる必要がある」(Ashton, T. S. [1949], p. 38) とし，楽観論者（ミル）と悲観論者（リックマンとチャドウィック）がそれぞれ別のグループに目を向けていたとするアシュトンの見解を，ウィリアムスンが初めて所得の不平等の推移として把え，マクロ的統計的に明らかにした点を，斎藤は一面では評価する (Saito, O. [1988])。しかしその反面，ウィリアムスンの不平等の拡大から縮小へというクズネッツ曲線を析出した資料は，第1に，成人男子のみの賃金であり，婦人や児童を含んでいないこと，すなわち性別賃金格差が考慮されていないこと，第2に，熟練労働の供給が非弾力的であったのはホワイト・カラーでいえるのであって，ブルー・カラーでは，そのような傾向は見いだせないことを，その賃金格差の推移が示している（第4表の(5)の数値）と指摘する。とくにブルー・カラーでは，（綿業を除いて）チャールズ・モアのいう「ニュー・スタイル」の徒弟制があったとし，徒弟制の関係で熟練労働供給を把える必要性を示唆している点は重要である。一方では，ウィリアムスンの示したホワイト・カラーの典型として弁護士の1815年の£447.5から1851年の£1,837.5への急増，そして1911年の£1,343への減少を劇的な極端な例として上げているが，斎藤はジャクスンが試みたようなこの数値は信頼できないとして排除して計算しなおすことまでは行なっていない。

斎藤論文の発表直前に，ジャクスンの論文が発表された (Jackson, R. V. [1987])。

ジャクスンはまず第1に，前記1851年の賃金格差3.76に注目する。これは全労働者＝製造業労働者＋「サーヴィス」業労働者についてであるが，「サーヴィス」業だけとると同年で8.44と異常に高い数値を示す（ちなみに，「サーヴィス」では1815年，4.67；1851年，8.44；1911年，3.58である）。その結果，全労働者の賃金格差が3.76に引き上げられているのであって，製造業だけみれば，1.66にすぎない。製造業だけをみれば，1815年，1.54；1851年，1.66；1911年，1.54と賃金格差の変化は1815年—1911年の期間で10%を越えず，クズネッツ曲線は見られない。つまり，ホワイト・カラー層を算入し平均して，はじめてクズネッツ曲線が見いだせるのである。ところが，第2に「サーヴィス」業の内容をみると，合計された数値のまやかしが暴露される。弁護士の名目年間所得は，1815年，£447.5；1851年，£1,837.5であり，この異常に高い数値が「サーヴィス」業の熟練労働者の賃金水準を上昇させているのであって，もしこの弁護士を除いて「サーヴィス」業を算出すると，1815年，£336；1851年，£220にすぎない。しかもウィリアムスンのサンプル数は，1797年と1805年で僅か6人，のち1827年までは4人にすぎない。それ故ジャクスンは，1851年の弁護士の年間名目所得£1,837.5に単純に弁護士数を乗ずれば，弁護士だけで£3,000万，すなわち粗国民所得の7%，全労働者所得の10%を取得するという奇妙なことになり，この弁護士の£1,837.5は信頼性がないので除外すべきであるとする。医師もサンプル数が極めて少なく（1851年は20人以下で，監獄の医師のみのデータ），除外すべきである等々，としてジャクスン自身が表を作成する（表は第4表のJ.の欄に記入してある）。これによると，全労働者で，1815年，2.26；1851年，2.73；1911年，2.25であり，非農業部門だけでも，1815年，1.87；1851年，1.98；1911年，1.96であり，クズネッツ曲線は見いだせない。こうしてジャクスンは，ウィリアムスンが使用したのと同じデータを使い，クズネッツ曲線が析出されるとした結論を覆した。と同時に，全国的レヴェルの賃金推移を算出する方法が，ホワイト・カラーも含めて総計することによっていかに歴史的実態を歪めて把握したかの一つの例を示したことにもなった。（続）

<イギリス産業革命期の生活水準に関する文献目録>（欧文のみ）

Armstrong, W. A., 'The Trend of Mortality in Carlisle between the 1780s and the 1840s: A Demographic Contribution to the Standard of Living Debate', *Ec. H. R.*, 2nd ser., XXXIV, 1981.

Ashton, T. S., *An Economic History of England: The Eighteenth Century*, 1955.

Ashton, T. S., 'Some Statistics of the Industrial Revolution in Britain', *Transactions of the Manchester Statistical Society*, 1947-8; in Carus-Wilson, E. M. ed., *Essays in Economic History*, vol. III, 1962.

Ashton, T. S., 'The Standard of Life of the Workers in England, 1790-1830', *J. Ec. H.*, IX, Supplement, 1949, in Taylor, A. J. ed., *The Standard of Living in Britain in the Industrial Revolution*, 1975.

Ashton, T. S., 'The Treatment of Capitalism by Historians', 1951, in Hayek, F. A. ed., *Capitalism and the Historians*, 1954.

Ashton, T. S., 'Changes in Standards of Comfort in Eighteenth-Century England', *Proceedings of the British Academy*, XLI, 1955.

〔上記3点は，杉山忠平，松村高夫訳『イギリス産業革命と労働者の状態』未来社，1972年に訳出されている。〕

Ashton, T. S., 'Economic Fluctuations, 1790-1850', *Ec. H. R.*, 2nd ser., VII, 1955.

Barnsby, G. J., *Social Conditions in the Black Country, 1800-1900*, 1980.

Barnsby, G. J., *The Standard of Living in England, 1700-1900*, 1988.

Barnsby, G. J., 'The Standard of Living in the Black Country during the Nineteenth Century', *Ec. H. R.*, 2nd ser., XXIV, 1971.

Berg, M., *The Age of Manufactures*, 1985.

Botham, F. W., 'Working-Class Living Standards in North Staffordshire, 1750-1914', unpublished Ph. D. thesis, University of London, 1982.

Botham, F. W. and Hunt, E. H., 'Wages in Britain during the Industrial Revolution', *Ec. H. R.*, 2nd ser., XL, 1987.

Bowley A. L., *Wages in the United Kingdom in the Nineteenth Century*, 1900.

Bowley., A. L., *Wages and Income in the United Kingdom since 1860*, 1937.

Bowley A. L. and Wood, G. H., 'The Statistics of Wages in the United Kingdom during the Last Hundred Years', *J. R. S. S.*, as follows:

Part	Author	Occupation	vol.	Year
I	Bowley	Agricultural workers, England and Wales	LXI	1898
II	Bowley	Agricultural workers, Scotland	LXII	1899
III	Bowley	Agricultural workers, Ireland	LXII	1899
IV	Bowley	Agricultural workers, General	LXII	1899
V	Bowley & Wood	Printers	LXII	1899
VI	Bowley	Building workers, English towns	LXIII	1900
VII	Bowley	Building workers, Scotland and Ireland	LXIII	1900
VIII	Bowley	Building trades, London and elsewhere	LXIV	1901
IX	Bowley	Yorkshire worsted and woollen workers	LXV	1902
X-XIII	Bowley & Wood	Engineering and shipbuilding workers	LXVIII	1905
XIV	Bowley & Wood	Engineering workers	IX	1906
XV-XVI	Wood	Cotton Industry, Manchester	LXXIII	1910

XVII	Wood	Cotton Industry, Bolton and District	LXXIII	1910
XVIII	Wood	Cotton Industry, Yorkshire and Scotland	LXXIII	1910
XIX	Wood	Cotton Industry, General	LXXIII	1910

Burnett, J., *Plenty and Want: A Social History of Diet,* 1966.

Burnett, J., *A History of the Cost of Living,* 1969.

Burnett, J. ed., *Useful Toil,* 1974.

Bythell, D., *The Handloom Weavers,* 1969.

Cannadine, D., 'The Past and Present in the English Industrial Revolution, 1880–1980', *Past and Present,* 103, 1984.

Checkland, S. G., *The Rise of Industrial Society in England, 1815–85,* 1964.

Church, R. A., *The Great Victorian Boom, 1850–1873,* 1975.

Clapham, J. H., *An Economic History of Modern Britain,* vol. I, 1926, 2nd ed., 1936.

Cole, G. D. H. and Postgate R., *The Common People, 1746–1946,* 1947.

Coleman, D. C., 'Labour in the English Economy of the Seventeenth Century', *Ec. H. R.,* 2nd ser., VIII, 1956, in Carus-Wilson, E. M. ed., *op. cit.,* vol. II.

Collier, F., *The Family Economy of the Working Classes in the Cotton Industry, 1784–1833,* 1964.

Collins, E. J. T., 'Harvest Technology and Labour Supply in Britain, 1790–1870', *Ec. H. R.,* 2nd ser., XXII, 1969.

Collins, E. J. T., 'Dietarty Change and Cereal Consumption in Britain in the Nineteenth Century', *Agricultural History Review,* 23, 1975.

Collins, E. J. T., 'Migrant Labour in British Agriculture in the 19th Century', *Ec. H. R.,* 2nd ser., XXIX, 1976.

Crafts, N. F. R., 'National Income Estimates and the British Standard of Living Debate: A Reappraisal of 1801–1831', *Explorations in Economic History,* XVII, 1980.

Crafts, N. F. R., *British Economic Growth during the Industrial Revolution,* 1985.

Davies, D., *The Case of the Labourers in Husbandry,* 1795.

Dean, P., *The First Industrial Revolution,* 1965.

Dean, P. and Cole, W. A., *British Economic Growth, 1688–1959: Trends and Structure,* 1962, 2nd ed., 1967.

Doty, C. S. ed., *The Industrial Revolution,* 1969.

Drummond, J. C. and Wilbraham, A., *The Englishman's Food,* 1939, rev. ed., 1957.

Eccleston, B., 'A Survey of Wage Rates in Five Midland Counties, 1750–1834' unpublished Ph. D. thesis, Univ. of Leicester, 1976.

Eden, F. M., *The State of the Poor,* 1797.

Engels, F., *The Condition of the Working Class in England,* 1845, translated by Henderson, W. O. and Chaloner, W. H., 1958.

Eversley, D. E. C., 'The Home Market and Economic Growth in England, 1750–1780', in Jones, E. L. and Mingay, G. E. ed., *Land, Labour and Population in the Industrial Revolution,* 1967.

Flinn, M. W., *The Origins of the Industrial Revolution,* 1964.

Flinn, M. W., 'Trends in Real Wages, 1750–1850', *Ec. H. R.,* 2nd ser., XXVII, 1974.

Flinn, M. W., 'Real Wage Trends in Britain, 1750–1850; A Reply', *Ec. H. R.,* 2nd ser., XXIX, 1976.

Flinn, M. W., 'English Workers' Living Standards during the Industrial Revolution: A Comment', *Ec. H. R.,* 2nd ser., XXXVII, 1984.

Floud, R. and Wachter, R., 'Poverty and Physical Stature; Evidence on the Standard of Living of London Boys, 1770–1870', *Social History*, 6, 1982.

Fores, M., 'The Myth of a British Industrial Revolution', *History*, LXVII, 1981.

Gash, N., 'Rural Unemployment 1815–34', *Ec. H. R.*, 1st ser., VI, 1935.

Gash, N., 'The State of the Debate', in Institute of Economic Affairs, *The Long Debate on Poverty*, 2nd Imp., 1974.

Gayer, A. D., Rostow, W. W. and Schwarts, A. J., *The Growth and Fluctuations of the British Economy, 1790–1850*, 2 vols., 1953.

George, M. D., *London Life in the Eighteenth Century*, 1925.

Gilboy, E. W., *Wages in Eighteenth-Century England*, 1934.

Gilboy, E. W., 'Wages in Eighteenth-Century England', *Journal of Economic and Business History*, II, 1930.

Gilboy, E. W., 'Labour at Thornborough: An Eighteenth Century Estate', *Ec. H. R.*, 1st ser., III, 1931–2.

Gilboy, E. W., 'The Cost of Living and Real Wages in Eighteenth-Century England', *Review of Economic Statistics*, XVIII, 1936, in Taylor, A. J. ed., *op. cit.*

Gourvish, T. R., 'A Note on Bread Prices in London and Glasgow, 1788–1815', *J. Ec. H.*, XXX, 1970.

Gourvish, T. R., 'The Cost of Living in Glasgow in the Early Nineteenth Century', *Ec. H. R.*, 2nd ser., XXV, 1972.

Gourvish, T. R., 'Flinn and Real Wage Trends in Britain, 1750–1850: A Comment', *Ec. H. R.*, 2nd ser., XXIX, 1976.

Granger, C. W. J., and Elliot, C. M., 'A Fresh Look at Wheat Prices and Markets in the Eighteenth Century', *Ec. H. R.*, 2nd ser., XX, 1967.

Griffin, C. B., 'The Standard of Living in the Black Country in the Nineteenth Century: A Comment,' *Ec. H. R.*, 2nd ser., XXVI, 1973.

Hamilton, E. D., 'Prices as a Factor in Economic Growth', *J. Ec. H.*, XII, 1952.

Hammond, J. L. and B., *The Village Labourer, 1760–1832*, 1911.

Hammond, J. L. and B., *The Town Labourer, 1760–1832*, 1917.

Hammond, J. L. and B., *The Skilled Labourer, 1760–1832*, 1919.

Hammond, J. L., 'The Industrial Revolution and Discontent,' *Ec. H. R.*, 1st ser., II, 1929.

Hartwell, R. M., 'Interpretations of the Industrial Revolution in England', *J. Ec. H.*, XIX, 1959.

Hartwell, R. M., 'The Rising Standard of Living in England, 1800–1850', *Ec. H. R.*, 2nd ser., XIII, 1961, in Taylor, A. J. ed., *op. cit.*

Hartwell, R. M., 'The Standard of Living Controversy: A Summary', in Hartwell, R. M. ed. *The Industrial Revolution*, 1970.

Hartwell, R. M. and Englerman, S., 'Models of Immiseration: the Theoretical Basis of Pessimism', 1975, in Taylor, A. J. ed., *op. cit.*

Hasbach, W., *A History of the English Agricultural Labourer*, 1966.

Hennock, E. P., 'The Mesurement of Urban Poverty', *Ec. H. R.*, 2nd ser., XL, 1987.

Hobsbawm, E. J., *Industry and Empire*, 1968.

Hobsbawm, E. J., 'The British Standard of Living, 1790–1850', *Ec. H. R.*, 2nd ser., X, 1957, in *Labouring Men*, 1964, also in Taylor, A. J. ed., *op., cit.*

Hobsbawm, E. J., 'History and "the Dark Satanic Mills"', 1958, in *Labouring Men*, 1964.

Hobsbawm, E. J., 'The Standard of Living Debate', 1975, in Taylor, A. J. ed., *op. cit.*

Hobsbawm E. J. and Hartwell, R. M., 'The Standard of Living during the Industrial Revolution- A Discussion', *Ec. H. R.*, 2nd ser., XVI, 1963.

Hopkins, E., 'Small Town Aristocrats of Labour and their Standard of Living, 1840-1914', *Ec. H. R.*, 2nd ser., XXVIII, 1975.

Hunt, E. H., *Regional Wage Variations in Britain, 1850-1914*, 1973.

Hunt, E. H., *British Labour History, 1815-1914*, 1981.

Hunt, E. H., 'Industrialization and Regional Inequality: Wages in Britain, 1760-1914', *J. Ec. H.*, XLVI, 1986.

Inglis, B., *Poverty and the Industrial Revolution*, 1971.

Jackson, R. V., 'Growth and Deceleration in English Agriculture, 1660-1790', *Ec. H. R.*, 2nd ser., XXXVIII, 1985.

Jackson R. V., 'The Structure of Pay in Nineteenth-Century Britain', *Ec. H. R.*, 2nd ser., XL, 1987.

Jevons, W. S., *Investigations in Currency and Finance*, 1884.

Jevons, W. S., 'On the Variation of Prices and the Value of the Currency since 1782', *Journal of the Statistical Society*, XXVIII, 1865, in Carus-Wilson, E. M. ed., *op. cit.*, vol. III.

Jones, E. L., 'The Agricultural Labour Market in England, 1793-1872', *Ec. H. R.*, 2nd ser., XVII, 1964.

Kelsall, R. K., 'The General Trend of Real Wages in the North of England during the Eighteenth Century', *Yorkshire Archaeological Journal*, XXXIII, 1936-38.

Knowles, K. G. J. C. and Robertson, D. J., 'Differences between the Wages of Skilled and Unskilled Workers, 1880-1950', *Bulletin of the Oxford Institute of Statistics*, 13, 1951.

Kondratieff, N. D., 'Die Preisdynamic der industriellen und landwirtschaftlichen Waren', *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, LX, 1928.

Kuczynski, J., *A Short History of Labour Conditions under Industrial Capitalism*, vol. I: Great Britain and the Empire, 1750 to the Present Day, 1942.

Kuczynski, J., *Studien zur Geschichite des Kapitalismus*, 1957, Teil I, Kap. II.

Landes, D., *The Unbound Prometheus*, 1969.

Layton, W. T., 'Changes in the Wages of Domestic Servants during Fifty Years', *J. R. S. S.*, LXXI, 1908.

Lill-Richardson, T., 'The Standard of Living Controversy, 1790-1840, with Special Reference to the Agricultural Labourer', unpublished Ph. D. thesis, Univ. of Hull, 1977.

Lindert, P. H., 'English Occupations, 1670-1811', *J. Ec. H.*, XL, 1980.

Lindert, P. H., 'English Living Standards, Population Growth, and Wrigley-Schofield', *Explorations in Economic History*, 20, 1983.

Lindert, P. H. and Williamson, J. G., 'English Workers' Living Standards during the Industrial Revolution: A New Look', *Ec. H. R.*, 2nd ser., XXXVI, 1983.

McCabe, A. T., 'The Standard of Living in Liverpool and Merseyside, 1850-75', unpublished M. Litt. thesis, Univ. of Lancaster, 1974.

Mckenzie, J. C., 'The Composition and Nutritional Value of Diets in Manchester and Dukinfield in 1841', *Transactions of the Lancashire and Chesire Antiquarian Society*, LXXII, 1962.

Mackenzie, W. A., 'Changes in the Standard of Living in the United Kingdom, 1860-1914', *Economica*, 1, 1921.

Mckeown, T. and Record, R. G., 'Reasons for the Decline of Mortality in England and Wales during the Nineteenth Century', *Population Studies*, XVI, 1962.

Malcolmson, R. W., *Life and Labour in England, 1700-1780*, 1981.

Marshall, D., 'The Domestic Servants of the Eighteenth Century', *Economica*, IX, 1929.

Marshall, J. D., *The Old Poor Law, 1795-1834*, 2nd ed., 1985.

Marshall, J. D., 'Nottinghamshire Labourers in the Early Nineteenth Century', *Transactions of the Thoroton Society of Nottinghamshire*, 1960.

Marshall, J. D., 'The Lancashire Rural Labourer in the Early Nineteenth Century', *Transactions of the Lancashire and Cheshire Antiquarian Society*, 1963.

Mathias, P., *The First Industrial Nation*, 1968.

Matsumura, T., *The Labour Aristocracy Revisited*, 1983.

Matthews, R. C. O., *A Study in Trade-Cycle History*, 1954.

Mitchell, B. R. and Deane, P., *Abstract of British Historical Statistics*, 1962.

Mitchison, R., 'The Movements of Scottish Corn Prices in the Seventeenth and Eighteenth Centuries', *Ec. H. R.*, 2nd ser., XVIII, 1965.

Mokyr, J. and Ógráda, C., 'Poor and Getting Poorer? Living Standards in Ireland before the Famine', *Ec. H. R.*, 2nd ser., XLI, 1988.

Moore, F., *Considerations upon the Exorbitant Price of Provisions*, 1773.

Morgan, V., 'Agricultural Wage Rates in Late Eighteenth-Century Scotland', *Ec. H. R.*, 2nd ser., XXIV, 1971.

Neale, R. S., 'The Standard of Living, 1780-1844: A Regional and Class Study', *Ec. H. R.*, 2nd ser., XIX, 1966, in Taylor, A. J. ed., *op. cit.*

Oddy, D. J., 'Working Class Diets in Late Nineteenth-Century Britain', *Ec. H. R.*, 2nd ser., XXIII, 1970.

Orwin, C. S. and Felton, B. I., 'A Century of Wages and Earnings in Agriculture', *Journal of the Royal Agricultural Society of England*, 92, 1931.

Ozanne, R., 'A Century of Occupational Differentials in Manufacturing', *Review of Economics and Statistics*, 44, 1962.

Parsons, S., 'The Standard of Living of the Working Class during the Industrial Revolution with Special Reference to Devon', unpublished M. A. thesis, Univ. of Exeter, 1978.

Perkin, H., *The Origins of Modern English Society, 1780-1880*, 1969.

Phelps Brown, E. H. and Browne, M. H., *A Century of Pay*, 1968.

Phelps Brown, E. H. and Hopkins, S. V., *A Perspective of Wages and Prices*, 1981.

Phelps Brown, E. H. and Hopkins, S. V., 'The Course of Wage Rates on Five Countries, 1860-1939', *Oxford Economic Papers*, n. s., II, 1950.

Phelps Brown, E. H. and Hopkins, S. V., 'Seven Centuries of Building Wages', *Economica*, n. s. XXII, 1955, in Carus-Wilson, E. M., ed., *op. cit.*, vol. II.

Phelps Brown, E. H. and Hopkins, S. V., 'Seven Centuries of the Prices of Consumables, compared with Builders' Wage-Rates', *Economica*, n. s., XXIII, 1956, in Carus-Wilson, E. M., ed., *op. cit.*. vol. II.

Phillips, A. W., 'The Relationship between Unemployment and the Rate of Changes in Money Wage Rate in the United Kingdom, 1862-1957', *Economica*, XXV, 1958.

Pollard, S., 'Wages and Earnings in the Sheffield Trades, 1851-1914', *Yorkshire Bulletin of Economic and Social Research*, 6, 1954.

Pollard, S., 'Investment, Consumption and the Industrial Revolution', *Ec. H. R.*, 2nd ser., XI, 1958.

Pollard, S., 'Trade Unions and the Labour Market, 1870-1914', *Yorkshire Bulletin of Economic and*

Social Research, 17, 1965.

Pollard, S., 'Sheffield and Sweet Auburn—Amenities and Living Standards in the British Industrial Revolution: A Comment', *J. Ec. H.*, XLI, 1981.

Pollard, S. and Crossley, D. W., *The Wealth of Britain, 1085-1966*, 1968.

Porter, G. R., *The Progress of the Nation*, 3 vols., 1836-43.

Potter, J., '"Optimism" and "Pessimism" in Interpreting the Industrial Revolution: An Economic Historian's Dilemma', *Scandinavian Economic History Review*, X, 1962.

Purdy, F., 'On the Earnings of Agricultural Labourers in England and Wales, 1860', *Journal of the Statistical Society*, XXIV, 1861.

Roberts, E., 'Working Class Standards of Living in Barrow and Lancaster, 1890-1914', *Ec. H. R.*, 2nd ser., XXX, 1977.

Rousseaux, P., *Les Mouvement de Fond de l'Economie Anglaise, 1800-1913*, 1938.

Rowe, J. W. F., *Wages in the Coal Industry*, 1923.

Royle, E., *Modern Britain, A Social History, 1750-1985*, 1987.

Rule, J., *The Experience of Labour in Eighteenth-Century Industry*, 1981.

Rule, J., *The Labouring Classes in Early Industrial England, 1750-1850*, 1986.

Saito, O., 'The Other Faces of the Industrial Revolution', *Keizai Kenkyu* (Hitotsubashi Univ.), 39, 1988.

Salaman, R. N., *The History and Social Influence of the Potato*, 1949.

Sauerbeck, A., 'Prices of Commodities and the Precious Metals', *Journal of the Statistical Society*, XLIX, 1886, in Carus-Wilson, E. M. ed., *op. cit.*, vol. III.

Saville, J., 'Review of I. E. A., The Long Debate on Poverty', *Ec. H. R.*, 2nd ser., XXVII, 1974.

Schumpeter, E. B., 'English Prices and Public Finance, 1660-1822', *Review of Economic Statistics*, XX, 1938.

Schwarz, L. D., 'Condition of Life and Work in London, c. 1770-1820, with Special Reference to East London', unpublished D. Phil. thesis, Oxford Univ., 1976.

Schwarz, L. D., 'The Standard of Living in the Long Run: London, 1700-1860', *Ec. H. R.*, 2nd ser., XXXVIII, 1985.

Scott, J. W. L. 'Food Adulteration and the Legislative Enactments Relating Thereto', *Journal of the Royal Society of Arts*, XXIII, 1875.

Seldon, A. ed., *The Long Debate on Poverty. Essays on Industrialisation and the 'Condition of England'*, 1973.

Shelton, W. J., *English Hunger and Industrial Disorders*, 1973.

Silberling, N. J., 'British Financial Experience, 1790-1830', *Review of Economic Statistics*, I, 1919.

Silberling, N. J., 'British Prices and Business Cycles, 1779-1850', *Review of Economic Statistics and Supplements*, V, 1923.

Snell, K. D. M., *Annals of the Labouring Poor: Social Change and Agrarian England, 1660-1900*, 1985.

Snell, K. D. M., 'Agricultural Seasonal Unemployment, the Standard of Living, and Women's Work in the South and East, 1690-1860', *Ec. H. R.*, 2nd ser., XXXIV, 1981.

Soltow, L., 'Long-Run Changes in British Income Inequality', *Ec. H. R.*, 2nd ser., XXI, 1968.

Stern W. M., 'The Bread Crisis in Britain, 1795-6', *Economica*, n. s., XXXI, 1964.

Taylor, A. J. ed., *The Standard of Living in Britain in the Industrial Revolution*, 1975.

Taylor, A. J., 'Progress and Poverty in Britain, 1780-1850: A Reappraisal', *History*, XLV, 1960, in Carus-Wilson, E. M., ed., *op. cit.*, vol. III.

Thompson, E. P., *The Making of the English Working Class,* 1963.

Tucker, R. S., 'Real Wages of Artisans in London, 1729–1935', *Journal of the American Statistical Association,* XXXI, 1936, in Taylor, A. J., ed., *op. cit.*

Von Tunzelmann, G. N. 'Trends in Real Wages, 1750–1850, Revisited', *Ec. H. R.,* 2nd ser., XXXII, 1979.

Webb, S., 'The Alleged Differences in the Wages Paid to Men and to Women for Similar Work' *Economic Journal,* 1, 1891.

Williams, J. E., 'The British Standard of Living, 1750–1850', *Ec. H. R.,* 2nd ser., XIX, 1966.

Williamson, J. G., *Did British Capitalism Breed Inequality?,* 1985.

Williamson, J. G., 'Earnings Inequality in Nineteenth-Century Britain', *J. Ec. H.,* XL, 1980.

Williamson, J. G., 'The Structure of Pay in Britain, 1710–1911', *Research in Economic History,* 7, 1982.

Williamson J. G., 'Why was British Growth So Slow during the Industrial Revolution?', *J. Ec. H.,* XLIV, 1984.

Williamson, J. G., 'Urban Disamenities, Dark Satanic Mills, and the British Standard of Living Debate', *J. Ec. H.,* XLI, 1981.

Williamson, J. G., 'Some Myths Die Hard—Urban Disamenities One More Time: A Reply', *J. Ec. H.,* XLI, 1981.

Wood, G. H., *A Glance at Wages and Prices since the Industrial Revolution,* 1900.

Wood G. H., *The History of Wages in the Cotton Trade during the Past Hundred Years,* 1910.

Wood, G. H., 'The Course of Average Wages between 1790 and 1860', *Economic Journal,* IX, 1899. Bowley and Wood の項も参照せよ。

Wood, G. H., 'Some Statistics Relating to Workind-Class Progress since 1860', *J. R. S. S.,* LXII, 1899.

Wood, G. H., 'Real Wages and the Standard of Comfort since 1850', *J. R. S. S.,* LXXIII, 1909, in Carus-Wilson, E. M. ed., *op. cit.,* vol. II.

Woodruff, W., 'Capitalism and the Historians: A Contribution to the Discussion on the Industrial Revolution in England', *J. Ec. H.,* XVI, 1956.

Woodward, D., 'Wage Rates and Living Standards in Pre-Industrial England', *Past and Present,* 91, 1981.

Young, A., *A Six Weeks Tour Through the Southern Counties of England and Wales,* 1769.

Young, A., *Six Months Tour Through the North of England,* 1770.

(経済学部教授)